HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	児童期における想起のコントロールの発達：“だいたい”と“正確”の教示を用いて [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	佐々木, 真吾
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第11633号
Issue Date	2015-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/58820
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Shingo_Sasaki_abstract.pdf (論文内容の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：佐々木真吾

学位論文題名

児童期における想起のコントロールの発達：“だいたい”と“正確”の教示を用いて

目撃証言研究に代表される記憶の想起に関わる研究では，事件からの経過時間，喚起される情動，聴取時の質問の種類などのいわば“外的要因”が，想起される記憶の量や正確さに及ぼす影響が検討されてきた。その知見は，子どもへの事情聴取法（司法面接）の研究・開発にも活かされている。しかし，近年，想起は外的要因によってのみ規定されるものではないこと，むしろ想起者による想起方法の意識化（メタ認知）や動機付けといった主体的な要因が，想起の質や量に影響をもたらすことも指摘されるようになった。このような想起者による想起内容のコントロールについての研究は十分ではない。特に，子どもから供述を得る際にはコントロール能力の発達が重要だが，その過程に関する知見は限られている。そこで本研究では，児童を対象とし，想起のコントロール能力が他の認知機能と関わりながらどのように発達するのかを検討した。

本稿は全 7 章，5 つの研究からなる。これらは大きく(1)想起研究の整理，(2)児童期における想起のコントロール能力の検討，(3)想起のコントロールと認知的諸要因の関連性およびその発達の検討に分けられる。以下，順に述べる。

1. 想起研究の整理(第 1 章)

第 1 章　序論：先行研究を展望し，問題点を整理した。その結果，(a)想起に関わる研究は，想起の量から質（正確さ）の検討へと移行してきたこと；(b)それに伴い，想起に影響を及ぼす様々な外的要因の検討と正確な想起を促す面接法の研究・開発が行われるようになったこと；(c)外的要因と個人内の認知メカニズムのダイナミクスは十分に捉えられてこなかったこと；(d)想起内容の正確さに焦点が当てられ，想起内容の詳細さをふまえた検討が不十分であることなどが明らかになった。また，Koriat らの想起のコントロールモデルについて触れ，想起のコントロールの発達過程は十分に解明されていないことを指摘した。

2. 児童期における想起のコントロール能力の検討(第 2 章，第 3 章，第 4 章)

教示の在り方や課題によって，児童がいかに想起をコントロールするのかを調べるために，第 2，3，4 章に対応する 3 つの研究を行なった。各研究は実験 1 と実験 2 からなる。実験 1 では“だいたい”と“正確”の教示を単独で行い報告を求めた（例えば，個数の報告を求める課題では，“何個ありましたか。だいたいでよいので教えてください”または“何個ありましたか。できるだけ正確に教えてください”のいずれかの教示を行なう）。実験 2 では，“だいたい”と“正確”の二つの教示を対比させた（例えば，“何個ありましたか。だいたいでよいので教えてください”による報告を求めた後，“何個ありましたか。できるだけ正確に教えてください”と，再度報告を求める）。なお，実験 2 では“だいたい”－“正確”の順で報告を求める概ね先群と，“正確”－“だいたい”の順で報告を求める正確先群を設けた。

第 2 章　研究 1：異なる詳細さで報告するスキルの発達：異なる詳細さでの報告を，小学 1，4 年生を対象に検討した。課題は，個数，長さの報告を求める数課題，色，場所の報告を求める言

葉課題の 4 課題であった。その結果，単独教示の実験 1 では，4 年生でのみ，また，数課題においてのみ，正確教示で詳細な回答，概ね教示で粗い回答が多かった。これに対し，対比教示の実験 2 では，4 年生であれば数課題，言葉課題の両方で，正確教示では詳細な回答が多く，この効果は概ね先群で顕著であった。以上より，詳細さのコントロールには，年齢による認知能力の発達と，課題の性質や教示の在り方といった文脈が関わっていることが確認された。

第 3 章　研究 2：“正確”“だいたい”の教示における報告内容の正確さ：前章のデータを“正確さ”（事実への近さ）の観点から再分析した。また，調査対象に大学生を加え，児童と大学生の想起のコントロールを比較した。その結果，教示が対比された場合，言葉課題の正確教示で正確かつ詳細な報告が多かった。しかし，数課題の正確教示では，詳細だが誤った報告が多く，特に 4 年生と大学生で顕著であった。以上より，教示に応じた想起のコントロールには発達差があること，課題の特性によって報告内容の正確さは変化することが示された。

第 4 章　研究 3：文章再生課題における想起のコントロール：ここでは出来事に関する文章を課題として用い，小学 1，4 年生，大学生を対象とし，想起のコントロールを検討した。また，想起された情報の重要性についても評定を求め，重要性との関連性についても検討した。その結果，単独教示の実験 1 では，正確教示を行なった場合，粗いが重要な情報が多く想起され，概ね教示では，重要でない情報の報告が控えられた。対比教示の実験 2 では，正確教示で，正確で詳細な情報が多く報告されたが，誤った情報の報告も多かった。以上より，出来事の報告における想起のコントロールは，対比の有無により，量から詳細さへとコントロールの重点が移行することが示された。

3. 想起のコントロールと認知的諸要因の関連性，およびその発達的検討(第 5 章，第 6 章)

想起のコントロールに関わる認知的要因とその発達的変化を，上記の 4 課題を用い，小学 1, 4, 6 年生を対象とし，対比教示を用いて検討した。第 5 章では，(a)教示の理解，(b)教示に応じた報告方法の意識化（メタ認知活動），(c)表象レベルでの回答構築（数や色の範囲を選択させたり，図を用いて位置を報告させる）の 3 要因を取り上げた。第 6 章では，(a)–(c)に加え，一般的な認知能力である(d)実行機能，(e)言語能力についても検討した。

第 5 章　研究 4：教示の理解，メタ認知活動，表象レベルの回答構築が異なる詳細さで報告するスキルに及ぼす影響：上記(a)–(c)と想起のコントロールとの関連性を調べたところ，特に 4 年生において，(b)メタ認知活動との関連が強かった。

第 6 章　研究 5：想起のコントロールにおける実行機能と領域固有のメタ認知活動の影響：上記(a)–(e)について，想起のコントロールとの関連性を検討した。その結果，6 年生では(d)実行機能と想起のコントロールとの間に，4 年生では(b)メタ認知活動と想起のコントロールとの間に強い関連性があり，1 年生では(c)表象レベルでの回答構築と言語レベルでのコントロールに関連性が認められた。

以上を踏まえ，第 7 章では，想起のコントロール過程とその発達について考察した。すなわち，想起のコントロールに影響を及ぼす要因として，(1) 想起の文脈，(2) 文脈の意識化（メタ認知活動），(3) 実行機能があることを示し，Koriat らの想起のコントロールモデルへの修正を提案した。また，想起のコントロールには，意識的なメタ認知活動が想起をコントロールする段階から，メタ認知活動の熟達化によりその影響力が小さくなる段階へと，発達的変化が生じる可能性を指摘した。さらに，本研究の司法面接への応用的示唆について述べ，今後の課題について議論した。